～～いま伝えたい私の教育論～～

「愛の鞭」と「暴力」の違い

元自衛官　宇佐静男

桜宮高校バスケットボール部主将が体罰を受け、自殺した。報道によると、生徒は自殺の前日まで、顧問の男性教諭から暴力的な体罰を執拗に受けていたという。痛ましい事件である。生徒の御冥福を心から祈りたい。

事件が大きく取り上げられせいか、これでもか、これでもかと教育現場の「体罰」が報道されている。スポーツで全国制覇を果たした名門高校などが次々と告発され、オリンピックにも飛び火した。柔道女子日本代表の強化合宿で暴力行為があったとして、全日本柔道連盟から戒告処分を受けた園田隆二監督が辞任を余儀なくされた。

メディアの過熱報道によって、日本国中で「体罰は全面的に悪」という「空気」が蔓延しているようだ。だが、こういう時こそ「空気」に流されず、教育について冷静に考え直してみる必要がある。

日本人は「空気」に流されやすい。「空気」だから後日、なぜそうしたかが分からない。昭和 20 年、3000 人を超える兵士を乗せた戦艦大和が沖縄へ特攻出撃した。「なんてバカなことを」と現代人は非難する。だが、当時これを決定した会議の出席者は口を揃えて証言している。「反対する空気ではなかった」と。

日本国中で「体罰イコール暴力・暴行」「体罰は全面的に悪」との「空気」が支配する昨今、「本当にそうか」と疑問を呈すること自体、非常に勇気がいる。だが、日本の教育全体に大きな影響を及ぼすことであり、あえて疑問を呈したい。

かつて日本には「愛の鞭」という美しい言葉が存在した。だが、この日本語は消滅しつつある。「愛の鞭」まで体罰だからいけないというのは偽善に思えてならない。勿論、今回の事件のように 30～40 発も殴ると言った体罰は、暴力であり「愛の鞭」でもなんでもない。

今、日本を支配する「空気」は「愛の鞭」と「暴力」とを（意図的？）混同しているように思える。筆者は決して暴力を肯定するものではない。ただ「愛の鞭」と「暴力」は明らかに違い、「愛の鞭」は本質的に教育には必要ではないかと考えるのだ。

「愛の鞭」は「子供達を進歩させることを目的とした力の行使」であり、「暴力」は「自分の鬱憤をはらすことを目的とする力の行使」である。

体罰が「暴力」である限り、決して認められるものではない。だが、子供を想い、子供の進歩の為に、時に「愛の鞭」は欠かせないこともあるのではないだろうか。

「子供が受けるべき最初の感謝すべき教訓、それは両親よりの平手打ちだ」とキエルケゴール（哲学者）は述べる。「子供には大人から叱られる権利がある」といわれるように、「愛の鞭」は子供が受ける権利であり、先生や親は子供に与える義務さえある。

報道によると、現在、学校現場は小学校の２割のクラスが学級崩壊状態だという。先生の話を聞かない。勝手に教室を動き回る。給食時間ではパンや牛乳を投げあう。教室や廊

下はゴミだらけ。全く授業にならず、教師は自信を喪い、多くの教師が辞めたり、鬱病になったりするという。

これこそ「愛の鞭」を暴力と決めつけ、「子供の人権尊重、自主性尊重」という偽善に支配された戦後教育の成果ではないか。「愛の鞭」の欠落は、子供への真の愛情の欠落でもある。

紳士の国イギリスのパブリックスクールでは、現代でも教育現場で本物の鞭が使われているという。イギリスのエリート育成のあり方は、長期にわたる熱心な模索の結果、文化の中に内蔵されている。「愛の鞭」も大国として受け継がれてきた歴史的ノウハウなのだ。またマレーシアやインドネシアのような教育熱心な新興国では、教師による鞭打ちが容認されている国も多い。

寺で座禅を組む際、睡魔が襲ったり、邪念が入るような時、お坊さんによって警策で打たれる。これを誰が暴力というか。警策で打つという行為は、坐禅修行が円滑に進むようにという「文殊菩薩による励まし」であり、「慈悲」であり「愛の鞭」に違いない。

「愛の鞭」とは話は逸れるが、実は通底している事例がある。日教組の教育研究集会の記事を読んで驚いた。ある教師が発言した。「子供達が自主的に挨拶をしたいな思ったら、挨拶を教えます」と。偽善にまみれた教師の言葉に驚き、あきれた。

善悪の分別がつかない子供達に自主性を求めるなんぞ、自主性尊重という美名に隠れた教育の放棄である。自主性といえば一見もっともらしい。だが子供達に必要なこと、当たり前のことは、強制してやらせることが教育の第一歩である。

会津には「什の掟」というのがあった。

１つ、年長者の言うことに背いてはなりませぬ

２つ、年長者にはお辞儀をしなければなりませぬ

３つ、虚言を言うことはなりませぬ

４つ、卑怯な振る舞いをしてはなりませぬ

５つ、弱いものをいじめてはなりませぬ

６つ、戸外で物を食べてはなりませぬ

７つ、戸外で婦人と言葉を交えてはなりませぬ

最後にはこう結ばれている。「ならぬことはならぬものです」と。

時代は変わり、６番目、7 番目は適用できない。だが、それ以外は今でも鮮度を失っていない。こうやって価値観を強制することから教育は始まる。

子供の人権尊重、自主性尊重といえば誰も反論できない。だが善悪の分別がつかない子供達に価値判断を丸投げし、言うことを聞かないからと言って、「愛の鞭」を使うこともなく、放置するのはまさに教育の放棄である。その結果が２割に及ぶ学級崩壊ではないか。人権尊重と言いながら、実は子供の人権を無視しているのだ。

教育は強制から始まる。強制は苦痛を伴うものだ。だが苦痛に耐えてこそ忍耐力がつき、人間として大きく成長する土台ができる。苦痛に心が萎えそうになったとき、「愛の鞭」で

奮起をさせることは「座禅の警策」と同様、必要不可欠である。「監督の平手打ちで目が覚めました」と一流のプロ選手がテレビで語っていた。

「幼き頃、肉体的苦痛を味わったことのない子供は、成長して必ず不幸な人間になる」とコンラッド・ローレンツ（オーストリアの動物学者）が語ることも真実であろう。

「愛の鞭」と「暴力」の境界は、なるほど難しい。だからといって「愛の鞭」を全面否定するのは誤りである。「暴力はだめだ」と絶えざる苦悶と反芻の結果、やむを得ず「愛の鞭」を振るう教師や指導者の真摯な姿勢が求められる。

今、日本を覆う「空気」によって、教師や指導者は萎縮するに違いない。良かれと思っても「愛の鞭」を振るうことはできなくなるだろう。この「空気」は膨張を続け、やがて大声で叱咤激励することも暴言、パワハラと非難されかねない。そうなれば学級崩壊は２割に止まらないだろう。

「愛の鞭」まで禁止した結果、学校教育は崩壊し、過保護と甘えの中に低迷し、自制心、克己心、忍耐力、持久力に欠けた欠陥青少年が大量発生することになろう。世の軽薄な「空気」に惑わされ、「愛の鞭」と「暴力」の安易な混同が、日本の崩壊につながることを国民は自覚すべきである。